



特 18
號 1833
卷 57



繪本左圖記五篇卷之三

目録

依久間聖政後大岩山寒石話

素山が舟候由國勢乃大岩と押寄るをん分の圖

妙嶽の至お羽田素山軍役を成て中河と振國

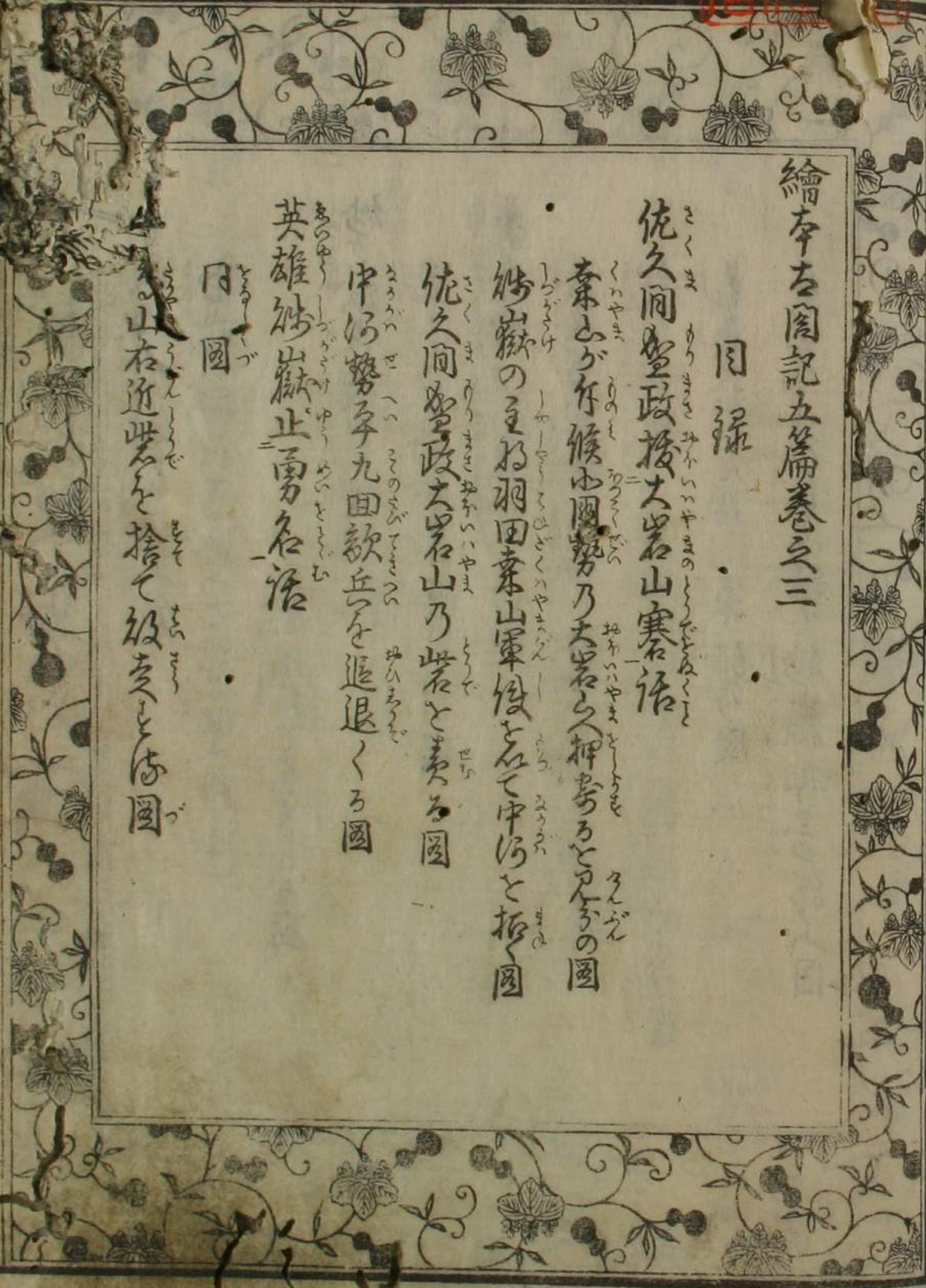
依久間聖政大岩山乃岩と表る圖

中河勢平九回款兵を退退くる圖

英雄妙嶽止勇名話

日國

山右道此を捨て故交とは圖



取勝家下知活
心道にの郷民を仍つて佐久間と降降

籠指物と乞て去る國

妙ヶ嶽之諸聖發勅活

建多を去清初多勇瓦の國

秀吉郷に心進及之活

農民を食物と持出く持業が軍と助る國

は本中守より同國長溪長徳大垣御及の地理

是角又即九清門軍配の國

秀吉郷農民と廻て妙ヶ嶽押去の活る國

繪本左衛門記五篇卷之三

佐久間盛政拔大岩山砦



論りまらく乃はし物活る小岩山砦さ行候を切一見せしむ
るよ弛久引てヤリるハ小國勢二万余り中河及の要害宮へさる
る俤よ引ていと中 桑山路ささ心よ中河が此之候を弛てヤリる
る其津の要害沙墓よと多勢と引け防戦難くい見急
此方の世々津つがくいと送るる小は時中河が軍勢いづき
兵具よ力を固り防戦の用を中としが桑山が後と得くは
大さ小津中中川の津石を膝沙うは収入より保る
は二ヶ所とる山古道と桑山へ分け給りて桑山



山 岩 大 勢 の 小 園 作 修 幸 山 見 分 と 押 考 風

五ヶ所巻三

一人退きしを武門の恥辱に思ひたるは、
 かくも老翁の角を折らんと言ふを、
 ておとくも山を要す。又後を去らせ、
 右邊まで此を面くおぼしめし、
 退るる中より、いと返りしる小桑山、
 又中河の陣へ復着と馳し、
 のいまさゆゑ、さきに孝子乃大軍、
 波をゆるぎ、おびをぬく。大山も崩れ、
 きにゆめい、美登る中に勢平、
 後討く出三尺、さうり藤上、
 又依久間三九、
 風天、
 きたる味方の形勢、
 又おのづか、
 是は心、
 叫びの、
 老翁、
 敵、
 角、
 軍、

又中河の陣へ復着と馳し、
 のいまさゆゑ、さきに孝子乃大軍、
 波をゆるぎ、おびをぬく。大山も崩れ、
 きにゆめい、美登る中に勢平、
 後討く出三尺、さうり藤上、
 又依久間三九、
 風天、
 きたる味方の形勢、
 又おのづか、
 是は心、
 叫びの、
 老翁、
 敵、
 角、
 軍、



戦後と甲河と
羽田素山
主君
徳川
の

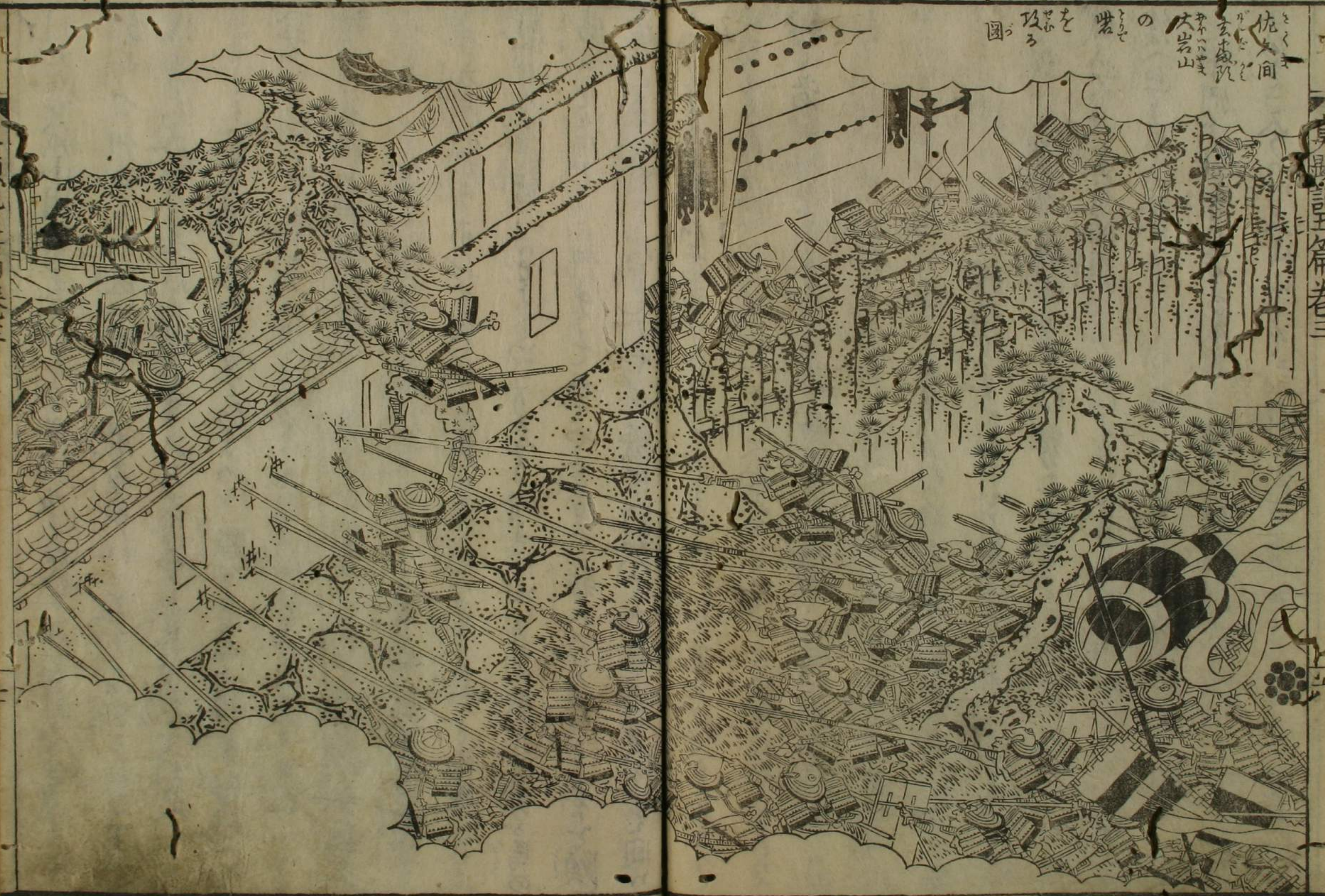
五石解卷三

史とて焼るは中河軍兵心散亂一舉に勝利と爲すは
盛政を方々と云ひしに神郡兵右邊門より余騎と分ちて計
略中合ら同道より中河が後へ身より小屋と焼しむるは
依久間両名を名を乃勇去るに爲と削り切先より火烟と知り
日引と事ひくる神郡又左邊門とけ我ひを去り自ら又つとぬけ
て中河が岩へ入りけ通く用急乃長柄の槍をて降城と突立は
激しき中河が岩に過はれちま右邊門市浦六死士を
下知しきびく銃砲を打ち防ぎ城とてしるは城の槍と
迫りしは方々多くなむに悔いと多し面く槍と多く突用と
思ひあめく我とてとて通ての是は物遠くは防ぎのてぞ見
たりたり中河は勇果岩流しとらんくははあく勢とまはり計

人よりともなふ面より依久間を奮然槍先と挿入とせし
突くとは中河小左邊門は倒之助命と捨く大敵にあたり
はく者切腹と突は勇と震く血戦し終に丸槍の中討
死しけ後中河は勇果神郡が後より龍の雲中と走り虎の咆
とせざるおとと鳴くあてくは神郡が軍兵左右一組といき
まうれ槍とて槍を他とて突て無れば後より依久間を奮然
を他つて押入り後方の中河が勢を三方より押包く鳴き叫んで
我とては是を盛政が知りしに神郡兵右邊門より余騎を
後へ身より小屋と焼しむるは一日は總隊をあげたりはは
中河が勢忽ち散亂し討る者殺を去り中河は大き
まはるき今叶はは討死せしる士衆と後へ本城に

佐々木
大岩山
の
岩を
攻る
図

貞徳傳五篇卷三



引たりる瓜小園勢をてりて中河原と見たり藤原のきこりて
 引たりる何れぞや返合せし勝負ありとてさういふ言を中河
 原秀太と怒りて久保は難き事乃るべきやと馬乃引を引りて
 きりてと血は深なる大右刀とりて「群がり来る紙筋勢は心中
 へ押しと鳴いて斬て入ら方にあたり正面は向ひ出ると幸甚甲より
 切らげ胸板と割付膝膝もに薙之角繩は折倒し吃々懐を猛虎
 乃てく子愛万化は勇と震ひ雲乃どく来来る大軍と退退る
 るの九回砂烟をあげて戦ひし機は希代乃勇士哉と両軍はよみ
 感ぜざるを惜しむとよきつりありあり中河九郎次郎清秀が馬の
 響はとどろくとい何れぞとひそや家守を難人のものなりと令と願
 けりんが口惜き次男とてちと機中へ引く沖自害はくはそ同の
 素防き戦ふはとくくと勅むる前敵乃大右佐久間玄蕃政盛
 政件乃後持りしとちとあさり中河勢平をこ引ひる玄蕃政盛
 仁系と鳴りて美一文字に討てり仁は勢平何れの形縁がたよき
 敵之勝負せんとお刀をうじて弛むるの佐久間が流り源六郎政
 頼をとりてて謳よと仁は清秀が後より中河九郎次郎曰く
 槍をとらば構へをうけて突来るはよと仁は政盛の清秀と
 戦ひ九郎次郎の源六郎と槍は合せ令限りて戦ふなり

中河勢平討記

玄蕃政盛頂王の勇と別して是と打た勢平誓會が威をふるひて
 向ひてと仁は清秀が後より中河九郎次郎曰く
 肝と冷し抱えたりと仁は政盛が近士は近遠一即志



甲河勢平
 九回款と
 退退る
 國づ

真景言五篇卷三

祐とて老あり守人みよのう人かえりく論をそそききり来り
 橋合より信秀自づけ突然れが中河より久しい切をさしと
 と信秀をそそき番匠大喝一夜徹屋又世んと打込む鉄棒うけ
 換して中河が丸の肩先(打込)馬よりどうと落しり」と一
 郎走り来て押へ着を揚うりうり表じし中河信秀和同傳
 突守とけの團と討しより雄名天下の身と表じしその合戦
 二度とそそき信秀見せびと信又押かく強敵惟但先秀
 を一番又突崩しそ勇と唱どい万華皆古風振いしむふ所
 敵て敵かく来曾わりの強おかりうりふそ番匠が二枚に命と居
 し鐵ヶ嶽又勇名瓜の(砂)は信王令とそい川に流し九郎次郎
 信秀が討死をそそき力ありと依久同原六郎又突依ら

其外中河が教古田去地極めへ助懸回線七日兵部日三去
 森本道徳山山守監物松村之助森権之丞を飼日即ち去る
 田平八分中線之丞懸後助之係甚吾時尻出助松田孫三郎
 田代右左衛門貞彦去ま日去地田徳村去左衛門入に去依守去孫
 右衛門村去左郎助去山懸去大教新八去心坊去孫始りし懸
 の者とも又十余人枕を並ぐ討死せり信秀討死日十二歳今尚
 大岩山乃藤藤又懐墓あり其銘の詩曰
 昔日屯軍地慨然憶指揮 墨虛山鳥遇 碑濕岬雲歸
 登陟攀空翠 躊躇對落暉 功名著竹帛 千載欽英威
 去後又刻石乃勢勇進 我先よく系入に大石去番匠
 去りて来拜我あり来とくと一番又城中に駐入陣小屋の標



英名雄
勇名
と
嶽
留
る
圖

英名雄
勇名
と
嶽
留
る
圖



高山右
此右
松交
と右
山

松交
と右
山

月余

真言宗
五輪
堂
三

五

る者三日余（一）はるる山々水國勢海山二を乃世と攻落し
 兵の限りなく中河勢を予が首首は物取等首首より十一を
 後首首者も皆せ世大勝敵が方（二）軍乃次牙をついで送り
 うは勝敵も大はれ依久間が働き今日よかきうさうさうさう
 元を後より引出物と取らるる又勝敵より別後をきて依久間が
 中（三）はるる味方大刺ありとてとるるやきききききききききき
 退討ありとて味方長途と経るといひ且戦ひは劣るる勝
 敵は今日中より引退し本陣へ向ひし走らるる上方勢
 を切崩さん（四）は戦乃中におり勢を弱く勢を弱く勢を弱く
 く（五）は合めて（六）はるる小云奮取けけけけけけけけけけ
 勢と見らるる勢と見らるる勢と見らるる勢と見らるる勢と見らるる
 勢と見らるる勢と見らるる勢と見らるる勢と見らるる勢と見らるる

勝敵我中河と討る山と（一）は勢を足給いざり角人
 左様ありとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 り能く今勢ひは除き秀吉がけ要堂は跡跡き信吉及と助
 けとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 法草とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 上方勢乃中河の内通せり者もこれゆへに吾今宵ハ家又一宿
 昨日はく一我を遂げ上方勢と退敵（二）を後より引退し入内
 て其後をきりしはるる耐は盤政城が嶽乃塞素山羽回が方（三）軍後
 ともるる山がごとく（四）は山々水國勢海山二を乃世と攻落し
 考うけ（五）はれりよア又馬とて秀吉が急と考らるるし走らるる浪のあつた



水辺の
郷民皆
依之同
の
とて去る
園

真蹟
五篇
卷三

十四

三度の又打ちたり玄蕃院心増り左右と見てヤクらの老騏の驚
 馬ま芳里勝家しとや老老まゆまうととその後返るは
 及ばりけは軍後陣に馳海向かると勝家の中收勝家
 長隊で呼喚吐きうる玄蕃院一戦乃勝利と誇おれをえんり
 今にあり猶とと後陣の侍を全くと敵乃来り公待とて
 用意をせらるる激又勝家が下知のしく玄蕃院軍と以し然
 後乃と救後勝と心を合せ依り摩惠多ると勢と合せ戦ふり
 たりと上方勢百万人として推来りとも危きゆみとて此故令強勇
 を必破とつ方の聖政を教たり一軍を秀吉をしく
 勝家代りつ自身玄蕃院が陣に立列してゆくと五月の
 假若敵度及ぶ内たる日
 家雨の乃勝芳のそとみく

賤ヶ嶽之諸墨騷動

去後と半本山嶽ヶ嶽乃要害教たり外山嶽のみと中河討記
 なる山嶽と捨る為ゆ今志津嶽乃岩と表抄と度へは諸軍
 氣と喪ひ力たるも今つとや要害の城と移りともゆんと動
 顔固ま大方かつにぬけくは為ゆ若殺しとと月と林と面
 九清門大と移るきかくて味方無敵軍と以しと馬と騰り太者
 して明瞭大の秀吉御大軍と師ひ来りけ急と救ひ移るをや諸
 軍おれ強ぐり方と密く侍を守るべと呼りく陣營と馳巡
 とは為支度する者たしけ一と又励され無軍鳴りと玄蕃院
 て悔へる是邪子田が出ると即計たりとれとも果して其

初見勢勇の図
くろと
まふ
右若湯



真蹟
五篇
卷三

真蹟
五篇
卷三

「は」が陣中もとと下へと發動「士卒皆落支度の」まろは
「ま」をてんく軍ね吹ま大は怒り中河も山が岩敵よなまに連
味方後軍にも定るは「敵もよせざる」をに落支度もる勝
痛者の吾陣中又まもも蓋は「一足もよく迎ゆべ」今も秀
吉乃後浩来り仇久間柴田公お崩まは「陣中」おんりの
力と落さば捕へと固めよ令よ宵き下知よ強いざる宵の首を
刻く軍法を「下」に「敵」に「中」に「陣中」に「陣中」に
袖めて人心地乃「陣中」に「陣中」に「陣中」に「陣中」に
「味方」の「勝」敵心えちく「味方」の「勝」敵心えちく「味方」の「勝」敵心えちく
いむた道長り馬と飛「て」馳ゆ「が」所游の内よまゆる大おま
勝「味方」の「勝」敵心えちく「味方」の「勝」敵心えちく「味方」の「勝」敵心えちく
力と落さば捕へと固めよ令よ宵き下知よ強いざる宵の首を
刻く軍法を「下」に「敵」に「中」に「陣中」に「陣中」に
袖めて人心地乃「陣中」に「陣中」に「陣中」に「陣中」に
「味方」の「勝」敵心えちく「味方」の「勝」敵心えちく「味方」の「勝」敵心えちく
いむた道長り馬と飛「て」馳ゆ「が」所游の内よまゆる大おま
勝「味方」の「勝」敵心えちく「味方」の「勝」敵心えちく「味方」の「勝」敵心えちく

秀吉の江北進發

「は」が陣中もとと下へと發動「士卒皆落支度の」まろは
「ま」をてんく軍ね吹ま大は怒り中河も山が岩敵よなまに連
味方後軍にも定るは「敵もよせざる」をに落支度もる勝
痛者の吾陣中又まもも蓋は「一足もよく迎ゆべ」今も秀
吉乃後浩来り仇久間柴田公お崩まは「陣中」おんりの
力と落さば捕へと固めよ令よ宵き下知よ強いざる宵の首を
刻く軍法を「下」に「敵」に「中」に「陣中」に「陣中」に
袖めて人心地乃「陣中」に「陣中」に「陣中」に「陣中」に
「味方」の「勝」敵心えちく「味方」の「勝」敵心えちく「味方」の「勝」敵心えちく
いむた道長り馬と飛「て」馳ゆ「が」所游の内よまゆる大おま
勝「味方」の「勝」敵心えちく「味方」の「勝」敵心えちく「味方」の「勝」敵心えちく
力と落さば捕へと固めよ令よ宵き下知よ強いざる宵の首を
刻く軍法を「下」に「敵」に「中」に「陣中」に「陣中」に
袖めて人心地乃「陣中」に「陣中」に「陣中」に「陣中」に
「味方」の「勝」敵心えちく「味方」の「勝」敵心えちく「味方」の「勝」敵心えちく
いむた道長り馬と飛「て」馳ゆ「が」所游の内よまゆる大おま
勝「味方」の「勝」敵心えちく「味方」の「勝」敵心えちく「味方」の「勝」敵心えちく

農に民は食す物を持し羽柴の軍と助國



真蹟記五篇卷三

敵以腰刀を抜て額よりくハ横合戦は勝つるを又六度分
 躍りあがり大垣の陣不又氏を内膳に城尾を助とめて押へし
 馬引をせしむと打ちあり諸軍はより退付しとして一騎驅し地出
 後ハ馬出りの若侍我後追と狼狽強き敵と合せて退立たしを
 く七騎ぞ續きつる秀治馬より大着るを左右の人を向ひの
 まい我の相柴を右なりと今必勝の謀ありて妙ヶ山(孤竹小園
 勢と藤堂と山内退く馳来る味方乃軍兵共々食物とよ又十倍
 乃急突やんと呼りく打退給ふは法より三騎或ハ又誘引つてく
 退付或者後夜引とくハ其道乃百姓もしてんはに粥糝をんと
 をお出と喰せしれ軍勢餓りたり清く追立く急ぎつる秀治
 御いたるがれ乃後とまどく強く驅せ給ふは村と玉村とをき後

川村よりやまき馬と(側)給ひるが先日大垣へ出陣の時より形
 危急乃体人よとく村に里く又強馬まよとく(至給ひしれ)が
 かの乗給ふは打ちあり息とりけりせは急ぎ給ふは叔父にて馬と
 又快とあつる小立りの若と石れ一ハの御石筋乃村(を)り日
 美濃守より人討ありより松明を多く出(給)り来る軍勢と
 遠くじと福させ又一ハの長濱の石筋(を)り百姓り町人介末一
 井太豆(井)と出(末)の粥(煮)置(け)給ふは本本の宿(持)末(今)
 宵中又柴田勝家と討滅(と)き計(策)あり本(意)と(違)り(後)
 信の養(員)と(立)て(給)ふは又(清)院(と)合(せ)て(馳)給(ふ)馬(と)村(を)
 て又馬と(側) (各)給(と)は(急)ぎ(給)ふ(家) (寺)村(と)る(を)

森名寺とて白宗の寺あり(寺) (檀) (信) (僧) (日) (出) (來) (吉) (郷) (の) (慈) (惠) (と) (蒙)



北
西

真
石
河
内
郡
三
上
村

其二

田
津
山

东
津
山

石
山

海
の
山

大
沢

大
音

西
山

堀
切

木
本

玉
田

千
田

东
物
部

石
劬
山

横
山

西
物
部

东
高
田

中
村

破
野

唐
川

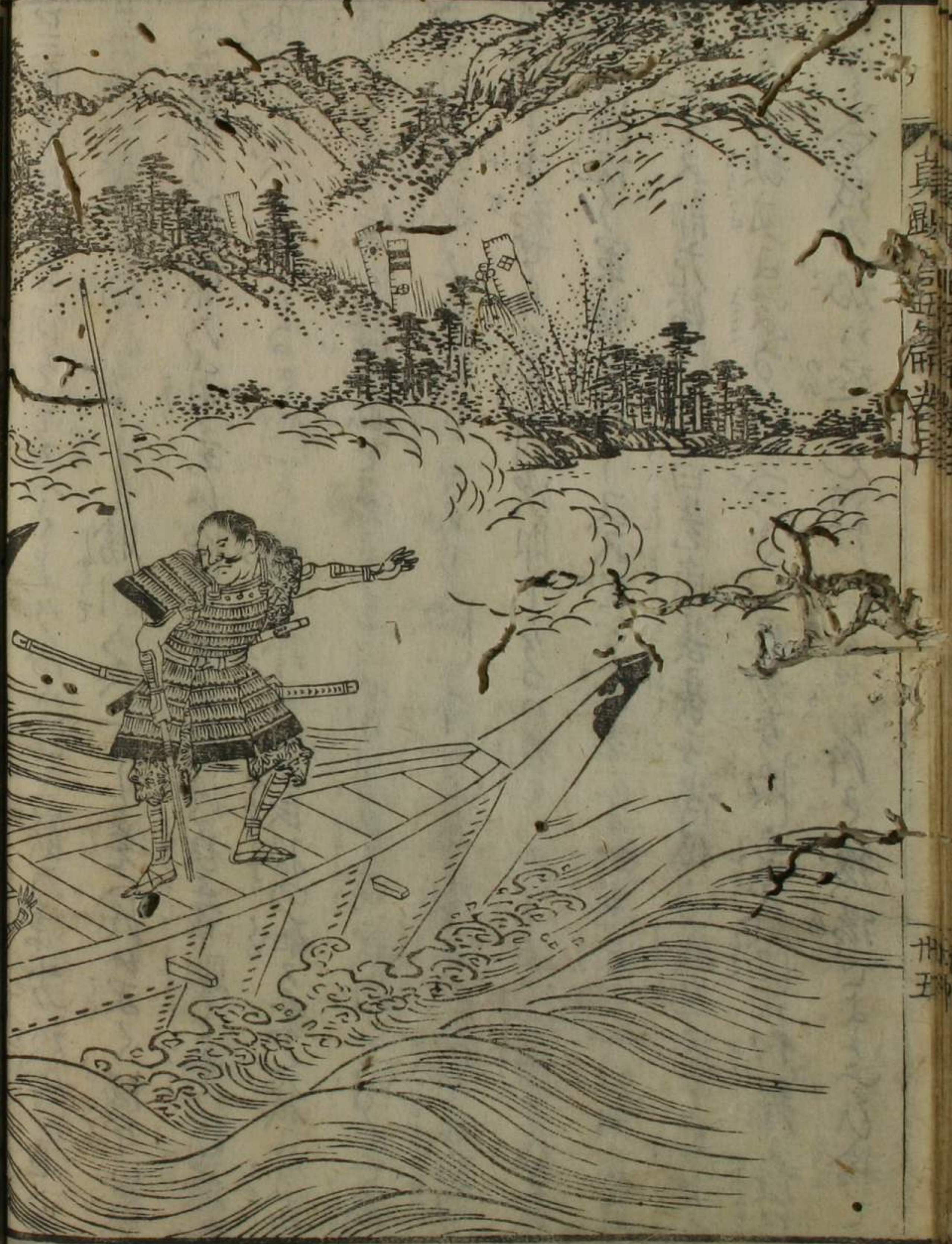
九
三

取らば急ぎ幕をたんとおかし
 右御下持けなれは時外候が
 珍し扱乃村の何れもや
 といふ中次第の右御まけ村の名取不吉に
 まはれと尋て男孫不吉を心せ推し
 言とといひの秀吉御とといふん
 後天下の統一の討懸愛とて
 向乃正し
 海津は又固め居る
 海津の嶽乃換子心元
 去るより葛藟尾と
 火の光りもく揚り
 りぞ急ぎ船と行
 三郎右衛門河を
 止い小勢して向い
 又籠り防禦乃
 海津とて三軍と
 謀計あり
 意より又船と
 止いしと申せら
 海津漕の軍勢と
 いらんや又即左
 一よりと款又
 向うと合戦乃

三郎右衛門河を
 止い小勢して向い
 又籠り防禦乃
 海津とて三軍と
 謀計あり
 意より又船と
 止いしと申せら
 海津漕の軍勢と
 いらんや又即左
 一よりと款又
 向うと合戦乃



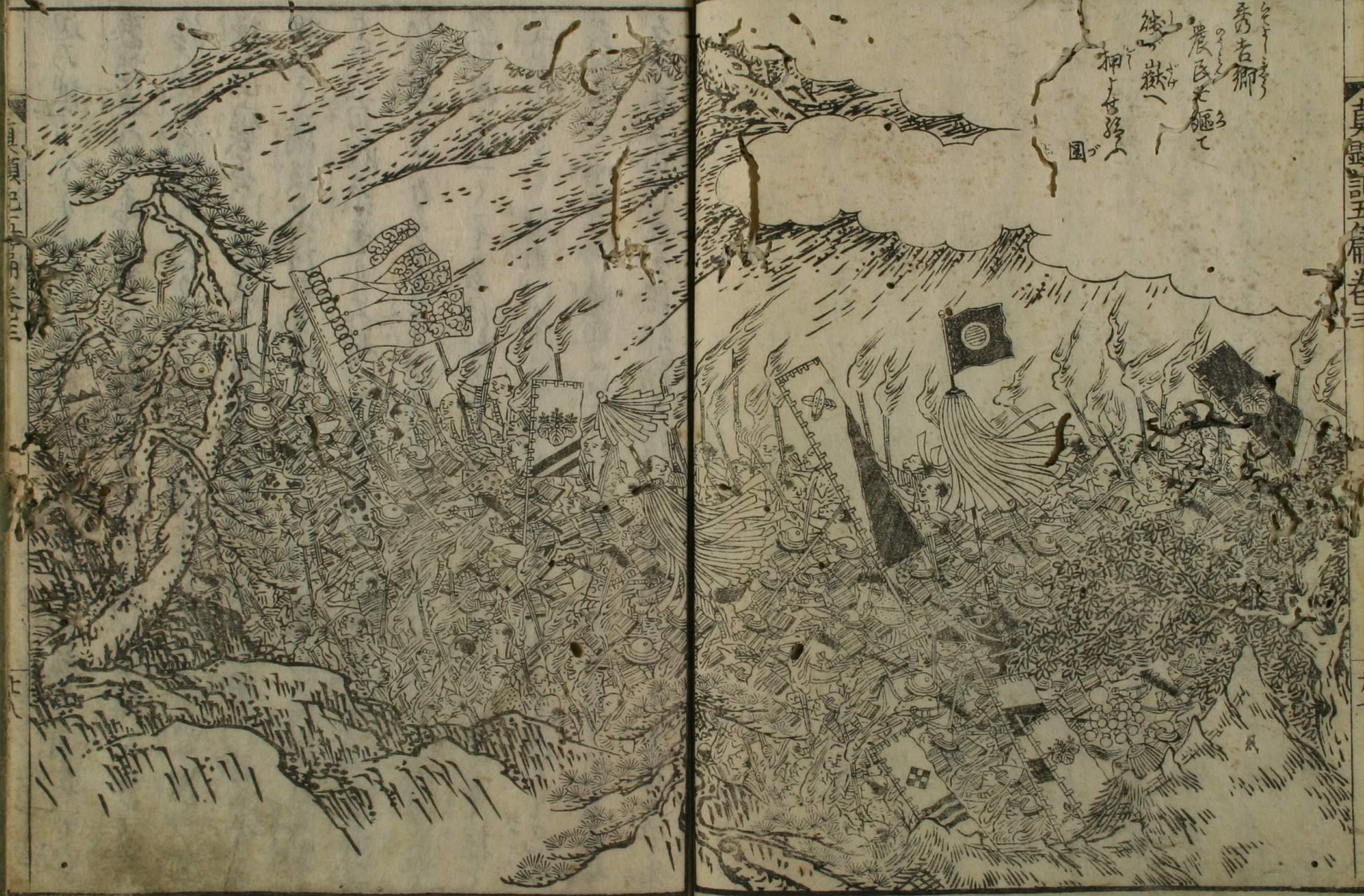
毛角五郎左衛門
軍配の圖



真風

十五

備又これに月ハ恥と飛とをとして備を約したりは附依久間
 玄蕃の跡に結ヶ嶽の城と云ふ 神治山は旗本と居る日の暮る
 と結らるが又く大陽西に傾き黄昏時ありこれハ結ヶ嶽の案
 山羽田へ軍使をまよく城と開き後に送りたる小城兵今
 日は又く用意乃は鉄炮を五山に込めらるくと打出せばおひけ
 られた小國勢を三十人計に打倒され扱ひ係りたるふくそを城
 かりば一息は衰崩せよそ揺りんで攻まれば城中より雨のおとく
 打出の鉄炮は面もしりぐらん中よりもなく晴夜るれば乃も低く
 ぶざれば女貞人おびけく衰徳んで又くふ後よりもお
 聖政に怒り追えく衰下るる元來は城を治理は要害した構へ
 るれハ陰謀と及ぶるる花はもも飛來る矢炮は恥と出る
 後引味方乃は勢は抑えらる道徳一き坂治晴との園一とさりく
 發のをも衰探せしはかくる城方をも是角又即左衛門
 長系乃は勢と引合し加勢して入城されば城中の將軍收めり限り
 ちく又は一倍乃は英氣とは鉄炮と放ら矢と飛出し圍を破つて防ぎ
 たる長系乃は軍使をも諸方乃は岩要害の陣くそ外の近辺の村里
 一は是角又即左衛門加勢として只今御子嶽の城を籠りたり心を
 備へ計義と定めて合戦とし福也たるふく諸方一日乃は力と
 得る勇まぬ若りるる激は是角乃は勅諭軍を訓える老練の
 大おもの後は人皆感じらるる羽柴及び其日乃は夕陽本軍の
 宿を若び地形をもりて馬乃息と續せ終る軍勢
 追く馳來りる内をえや一万餘騎とも多州乃は長渡をも



秀吉卿
農民を驅つて
後山嶽
押上り給へ
國

貞島言五郎卷三

九十七

迎乃地下人とも御成に降ひて兵隊を討てて
 後持連のて多りなれはたお秀吉卿もあつて
 解とて食
 移ひ感限りなうらる諸軍勢も大まに勇も討ち
 換へは獲英として天下一統の耐長溪乃地まを許し
 移ふ今も
 抄外に諸般免許乃土地はなまり保るゝ大垣より本
 と乃百姓系を大ぬ乃知を取らぬ乃松明燈の御
 一の者ともちうとてなれに呼らる由共秀吉卿も勇も移ひ大勢
 の百姓も一くそ名は知るゝ此村乃名もそそ人あは豊福と
 文ゆへに歩軍に合じて回せ移ふ是は後々百姓も已
 が村名と呼らる御帳面は記し徳政の大方なりはまよ
 名乃西の田村は後後部勤在清門とらる者ありそ先祖は本

の御成に三郎吉清門浪人して出さ田村は後々
 勤在清門秀吉卿も就て信長もよ任せりしが志別とて
 名多病やて勤仕でて再い田村へ暫居せし今日秀吉卿
 大垣より一誘がけは本をまゝに希路にしし御成は
 是はしとて移り来りて入集るゝ小秀吉卿感懐かぎり
 かくて勤在清門は合し進郷進立乃農民と拓き集め大垣
 郷乃長溪乃郷民と是と合せ勤在清門と大ぬ乃地田津山の
 炭ののせ地も崩るゝ斗里岡の者をよとせ味乃乃城をか
 降へては移す嶽へと息とてうたに改移しは次第に味乃乃
 大軍は討たるゝ三万余人あつてを御押せりた右乃
 山々峯もも教乃の松明燈の御成は山後と

真圖言五篇卷三

照一萬乃軍物之及之
殺之りき形勢之

繪本古圖記五篇卷之三終

